

教 育 研 究 業 績 書				
				年 月 日
				氏名 村 山 聡 印
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
経済史		近世、家族、人口、環境、比較史科学		
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概 要		
1 教育方法の実践例				
2 作成した教科書、教材				
『歴史環境を考える』	2003.4	講義科目「歴史環境論」ほかに関する教科書の分担執筆		
『人類史のなかの人口と家族』	2003.4	本格的な論文集としての編集であると同時に、「経済史」「歴史学」「社会史」「歴史人口学」等の講義のための教科書としての機能も備えた分担執筆の著書		
『高齢化社会へのアプローチ』	2008.12	香川大学における講義科目「エイジングを考える」のための教科書として分担執筆		
3 教育上の能力に関する大学等の評価				
香川大学教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修の設置申請における〇号認定	1996.9	経済学特講ならびに経済学特別演習(経済史)に関する〇号認定を受けた。		
香川大学における自己点検・評価	2011.3	評価システム導入以来総合評価でaランク評価を受けている。		
学生による授業評価		毎学期作成されている授業評価において常に良好な評価を受けている。		
4 実務の経験を有する者についての特記事項				
5 その他				
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概 要		
1 資格、免許				
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他(科学研究費等の獲得状況)				
創成的基礎研究(旧文部科学省)	平成7~11年度	研究分担者「ユーラシア社会における人口・家族構造比較史研究」		
研究成果公開促進費	平成12~13年度	研究分担者「人口・家族構造関係資料のデータベース化」		
基盤研究(B)	平成13~16年度	研究分担者「前工業化期日本の家族とライフコースの社会学的研究:地域的多様性の解明」		
基盤研究(B)(海外学術調査)	平成16~18年度	研究代表者「近代移行期における財産と所有の比較経済史研究」		
基盤研究(A)	平成19~22年度	研究代表者「近代移行期における地域情報とその蓄積過程に関する比較制度研究」		
挑戦的萌芽研究	平成21~23年度	研究代表者「コミュニティ・ベースの地域開発に関する比較経済史的応用研究」		
基盤研究(B)(海外学術調査)	平成21~24年度	研究分担者「洪水常襲地における21世紀型水環境社会の構築」		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 Konfession und Gesellschaft in einem Gewerbezentrum des frühneuzeitlichen Deutschland: Das Wuppertal (Elberfeld-Barmen) von 1650 bis 1820.	単著	1990.3	Keio Tsushin(全335ページ)	現在のドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン地方に位置するヴッパータールの近代移行期に関してドイツ語で書いた比較社会経済史研究である。ギーンセン大学歴史学部において博士論文として受理されたものであり、その後、修正を加え公開した。マックス・ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神に関して、地方文書館を中心にした膨大なオリジナルの手書き史料に基づき、宗派間の相違の実態を明らかにした。

2 近世ヨーロッパ地域史論—経済・社会・文化の史的分析—	単著	1995. 9	法律文化社 (全210ページ)	博士論文に続き、現在のドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン地方に位置するヴッパータールの近代移行期に関して、新たな史料分析、研究史、都市化論等の書き下ろしを行った。マックス・ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神に関する議論から出発し、国民国家形成期の近世ヨーロッパにおける地域のあり方について論じた。
(学術論文)				
1 ヴッパー・タール (ウンター・バルメン) における地域信条と社会構成 (1816年) (査読付)	単著	1989. 1	三田学会雑誌 (慶應義塾経済学会) 第81巻4号 89~109ページ	現在のドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン地方に位置するヴッパータールの一地域であるウンター・バルメンの多信条社会について、職業構想、異宗派婚のあり方など、手書き史料に基づく、詳細な実証研究であり、マックス・ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神に関する議論に新たな視角を加えた。
2 歴史人口学におけるミクロとマクロ—日本およびドイツ語文化圏における Historical Demography の比較— (査読付)	単著	1990. 4	三田学会雑誌 (慶應義塾経済学会) 第83巻1号 176~190ページ	歴史人口学研究においては、経済学と同様に、ミクロのアプローチとマクロのアプローチがある。近年の社会史研究の多くはミクロのアプローチが主軸となっているが、集計的なマクロのアプローチの意味が失われたわけではない。とりわけ人口問題はマクロのアプローチも不可欠であり、ドイツ語圏と日本の歴史人口学研究の方法問題について新たな知見を提示した。
3 ミュンヒにおける相互浸透論の批判的検討—歴史研究と社会学理論—	単著	1990. 10	寺尾誠編『温故知新一歴史・思想・社会論集—』慶應義塾大学出版会、第14章、353~378ページ	タルコット・パーソンズ以来の社会システム論は、社会構造の分析には有効なツールを与えているものの、その構造機能主義的な限界は、社会の動態を把握する際に顕著となる。ドイツ語圏の社会学者リチャード・ミュンヒは新たに相互浸透論という社会把握の方法的提示を行っており、その理論的な枠組みが歴史研究においても有効である事を示した。
4 近世ヨーロッパにおける家族・教会・墓—ニーダーライン地方ヴッパー・タールの事例を中心に— (査読付)	単著	1993. 1	藤井正雄/義江彰夫/孝本貢編『家族と墓』第一部 異文化のなかの墓 (シリーズ比較家族2)、早稲田大学出版部、45~62ページ	近世ヨーロッパにおける家族と教会と墓との関係について、博士論文以来研究対象地としている西独ヴッパータール地方の教会文書において、分析を行っていなかった手書き資料に基づき、墓への愛着、墓の場所の選択、そしてその個人的な判断と教会共同体の歴史的变化との関係を明らかにした。
5 ドイツにおける信条の時代と教区簿冊—エルバーフェルトの改革派ゲマインデの場合— (査読付)	単著	1994. 10	三田学会雑誌 (慶應義塾経済学会) 第87巻3号 85~98ページ	ルターの宗教改革運動以来、ドイツそしてヨーロッパにおけるキリスト教教義に関する深い理解と神学者間での熾烈な討議は、近世ヨーロッパの民衆世界も大きく変貌させた。その一つが教会の管理のあり方の変化であり、共同体による自律的な教会管理は教会会議の議事録など独自の史料文化を創出した。
6 衰退する都市と発展する都市—近世ドイツ・ベルク公爵領場合— (査読付)	単著	1994. 10	歴史学研究 No. 664(1994-10増刊号) 77~83ページ	ライン下流地方に位置する諸都市は、発展する都市もあれば衰退する都市もあるというのが初期近世の特徴であった。手工業が中心である伝統的な中世都市の延長線上にある都市、あるいは新たな繊維産業などが勃興する都市と農村の両方の特徴を備えた新興都市などである。その実態とその相違の原因を明らかにした。
7 死に囲まれた世界から確かな生の社会へ	単著	1995. 3	生と死に関する総合的研究 (香川大学平成6年度教育研究特別経費による報告書) 第1部第2章 14~25ページ	平均寿命で言えば、近世社会は非常にレベルが低い社会であるが、長生きが出来なかったわけではない。乳幼児の死亡率が高く、また、青少年の段階でも死亡する可能性を防ぐとはできなかった。疫病、飢餓、戦争が大きな死亡要因となっていたが、そのような死に囲まれた世界から次第に確かな生の社会へと変貌する過程を歴史人口学的に明らかにした。
8 宗教文化的中心地と経済的中心地—日本とヨーロッパ特にドイツとの比較—	単著	1996. 3	死の文化史と宗教 (平成7年度香川大学教育研究特別経費による報告書) 第一部第六章 67~80ページ	都市化の比較研究は、中心地分析、規模順位分析などの多くの地理学的な分析がこれまで歴史研究において見落として来た論点を明らかにすることのできる証拠を提供している。近代移行期の日本とヨーロッパ特にドイツ語圏を比較することにより、宗教文化的中心地と経済的中心地のネットワーク形成の多様性を明らかにした。
9 近世都市の職業構成と家族構成—西ドイツ都市エルバーフェルトの事例—	単著	1996. 3	寺尾誠編『都市と文明』ミネルヴァ書房 324~341ページ	博士論文以降のミクロな歴史分析の対象地としているニーダーライン地方の商業町エルバーフェルトに関して、1703年から1704年にかけて作成された住民簿に基づき、職業構成と家族構成の関係を明らかにした。同じ都市内でも居住区においてその住民構成には大きな違いがあり、ミクロな歴史分析の有効性を明らかにした。

10	天保の危機と美作国の地域性	単著	1997. 3	Conference Paper Series No. 8 (ユーラシア人口・家族史プロジェクト) (文部省科研費創成的基礎研究) 全22ページ	現在の岡山県に位置する美作国の人口記録簿である「宗門帳」の悉皆調査に基づく調査研究の最初の成果である。とりわけ天保の危機の時代の村々における人口変化を比較して、その人口変化の地域性を明らかにした。水田稲作への專業化が進んだ山岳部でも人口減少が顕著であるのに対して、立地上交通の便もよく幅越的な経済構造を持つ地域の方がダメージが少ないことが分かった。
11	Regional differences in the age at marriage: A comparative analysis of early modern Germany and Japan.	単著	1998. 10	Conference Paper Series No. 25 (EurAsian Project on Population and Family History) 全30ページ	近代移行期のドイツ語圏と近世日本に関して、婚姻年齢がある程度比較できる資料が整った。まずは平均初婚年齢の比較をすることが先決であるが、注意する必要があるのは、平均値だけではなく、婚姻年齢の分布とその分布形態の経年的な変化である。特に分布のあり方の歴史的变化その地域の地域特性を明確に示していることを明らかにした。
12	Regional customs in Japan and regional identity in Germany: From the dual structure model to comparative socio-economic history.	単著	1999. 3	Keiichi Omoto (ed.), <i>Interdisciplinary Perspectives on the Origins of the Japanese</i> . International Research Center for Japanese Studies. The Eleventh International Symposium. Pp. 393-404	婚姻年齢の分布とその分布形態の経年的な変化について、近世ドイツと日本の比較分析の結果を受けて、その原因を探る論考を発表した。特に分布のあり方の歴史的变化その地域の地域特性を明確に示しているという点について、地域経済や生活形態を決定づけている地方の慣習がより大きな影響を与えている社会と、宗教的価値などの自覚に基づく人間行動が一定の地域性を示す社会の違いを明確にした。
13	記録された世帯とイメージされる家族—地域科学としての比較史料研究—	単著	1999. 7	Working Paper Series No. 9 (EurAsian Project on Population and Family History) 全36ページ	家族や世帯などの比較研究は家族史研究が定着するにつれて多くの研究成果が蓄積された。しかし、家族や世帯を把握している歴史資料自体が地域性や時代性を有したものである点は注目されることがなかった。歴史資料の比較研究つまり比較史料研究自体も歴史的な地域科学の課題であることを明らかにした。というのも一定の家族イメージがその史料のあり方に反映しているからである。
14	Regionalismus in der Geschichte der Familie. Die Frühneuzeit in Japan und Deutschland im Vergleich.	単著	1999. 12	ドイツ研究 (Deutschstudien) (日本ドイツ学会) No. 29 106~120ページ	家族の歴史研究は、現代よりも近代移行期の方が家族の地域性が顕著であることを明らかにしてきた。初婚年齢の高さ、出生率の高さなどに見られる地域性は、地域の中でのそれぞれの要素の分布のあり方の違いであると同時に、分布や平均値での違いは、一定の地域単位が一定の社会的特徴を有するその内容についての詳細の分析が必要であることを明らかにした。
15	西日本地域における宗門改帳の収集	単著	2000. 4	研究報告書 (連水融編『文部省科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」(平成7~11年度) 最終実績報告書』) 1. 2. 2 (分担執筆) 25~44ページ	ユーラシア社会の人口・家族構想比較史研究 (ユーラシアプロジェクト) では、ベルギー、イタリア、スウェーデン、中国と同様にセンサスタイプの歴史資料が残されている近世日本との比較研究がなされた。特に西日本地域の人口関係資料の整理が不十分であったため、悉皆調査を行い、特に人口学的分析に十分に耐えうる50年以上継続した記録が残されている地域を明らかにした。
16	記録され続けた世帯と個人の年齢—近世ドイツとの比較における徳川日本 (査読付)	単著	2001. 3	日本研究 (国際日本文化研究センター紀要) 第23集 53~75ページ	キリスト教教会において、洗礼、婚姻、死亡についての記録が残されているが、最も大切な記録は洗礼の記録であり、その際、陪席者などの詳細が書かれるものの洗礼を受けるものは生まれたばかりであり、年齢記載は意味をもたない。それに対して近世日本においては、毎年作成されるセンサスタイプの資料において、村人全員についての年齢が記載されていることが多い。年齢記載の有無自体が両者の社会の差異を示していることを明らかにした。
17	Regional standardization in the age at marriage. A comparative study of pre-industrial Germany and Japan. (査読付)	単著	2001. 4	The History of the Family. An International Quarterly. Vol. 6-2. Pp. 303-324	ドイツ語圏と日本の近代移行期について、婚姻年齢の平均値ならびに分布の歴史的变化に関する比較研究を行った。特に歴史的变化として観察される標準化は、時代と場所によって相違が見られるものであり、家族の地域性を議論する差異に関して、初婚年齢などの一般的に得られる人口データそのものよりも、その歴史的变化に注目する必要があることを明らかにした。
18	近世ライン下流地方における個と家の異動	単著	2002. 4	連水融編『近代移行期における家族と人口』ミネルヴァ書房 205~228ページ	ライン下流地方の小都市エルバーフェルトの住民簿に関する詳細な分析を行った。特に女性のライフコースに着目して、職業変遷にあり方、婚姻の有無などの分析を行った。また、家系図が描かれ、また、個別の家族の歴史の詳細が分かる資料に基づき、名望家層と貧しい階層の女性たちの一生のあり方の違いを明らかにした。
19	人口史料の比較近世史	単著	2003. 4	木下太志・浜野潔編著『人類史のなかの人口と家族』晃洋書房 101~120ページ	人口史料として把握される対象は、一定範囲の住民の全人口を把握しようとする住民台帳、住民の課税額などを明確にする目的を有した課税台帳などがあるが、年歴記載も含めて、毎年住民総数を把握しようとするような社会は世界中でも限られている。近世社会においてそのような史料が存在しているのには一定の理由があることを明らかにした。

20	信条化の時代	単著	2003.4	歴史環境を考える会 監修 『歴史環境を考える』 美巧社 112～126ページ	歴史研究の多くは、一定の時代区分を明らかにしている。宗教改革期、啓蒙の時代など、その時空間の特徴を明らかにするのが時代区分である。ドイツの歴史家であるハイント・シリングを中心に精力的に進められた16世紀中葉から17世紀中葉にかけてのヨーロッパは信条化の時代と名付けられた。信条化とは、キリスト教的信条が社会的に制度化する過程であり、その歴史学的意義を明らかにした。
21	こどもメディア開発-香川県土庄町立豊島小学校との交流開始-	単著	2004.9	香川大学教育実践総合研究 第9号 57～72ページ	産業廃棄物の島として世界的に有名となった豊島であるが、豊島の小学生と大学生が交流することにより、新たな島の魅力や問題点を発見することができる。持続的な交流が新たな教育メディアの開発につながることを明らかにした。
22	マイクロスタディはドイツ研究に何をもたらすか	単著	2005.3	ドイツ研究 No. 39 36～51ページ	ドイツという総体を一つの特徴として議論することができるのは、ドイツと比較できる地域総体、つまり、フランスやイギリスなどが存在するからである。中長期的な歴史資料を観察すれば明らかなのは、自明の前提としている「ドイツ」そのものを問題にする必要があるということであり、さらに、より詳細なマイクロレベルでの観察は捨象されていた地域の要素を発見することができることを明らかにした。
23	海の支配と隠れキリシタンのライフコース	単著	2005.3	研究報告書（落合恵美子編） 『前工業化期日本の家族とライフコースの社会学的研究-地域的多様性の解明と国際比較-』、平成13年度～16年度科学研究費補助金、基盤研究(B)、課題番号13410070 83～96ページ	5千人もの隠れキリシタンが発見された近世天草下島の高浜、崎津、大江、今富の村々について、文化2年に集中している歴史資料の詳細な分析を通じて、当時の隠れキリシタンがいかに把握され、また、キリスト教信条がいかに伝達されたものか、そしてその信仰の伝達と家族との関係を明らかにした。
24	中近世ドイツにおける相続パターン-決定要因-ルール・システム・パターン-	単著	2005.10	香川大学教育学部研究報告 第1部第124号 49～65ページ	ナチスドイツの時代に相続慣習を統一して、すべて、長子相続制に統一しようという動きがあった。また、多くの歴史研究が19世紀に抱かれた家族像の影響を受けて、一定の家族類型や相続パターンが支配的であるという主張が根拠もなくなされていた。しかし、実際の近代移行期は実に様々な相続パターンが存在していたと同時にそのようなルールが一定地域に広がるには歴史的に解明できる理由のあることを明らかにした。
25	UK/US大学調査の目的と概要	単著	2006.3	香川大学大学教育開発センター『香川大学教育研究』第3号「特集：大学の将来-50年後を目指して-」 21～29ページ	2004年2月に行った英国ならびに米国の大学調査に関する目的と概要をまとめた。学長補佐としてのとりまとめを行ったものであり、今後の大学改革に資することを目的として、「大学の新しい管理運営ならびに事務組織に関する現状調査」としてレスター大学を中心に英国の大学事情、そして、「特色ある教育研究プログラムならびに事務組織に関する実地調査」として、ウィリアムズ・カレッジ、アムハースト・カレッジなどの調査を行った報告である。
26	英国レスター大学「教育開発・サポートセンター」-修学支援体制のモデルとして-	単著	2006.3	香川大学大学教育開発センター『香川大学教育研究』第3号「特集：大学の将来-50年後を目指して-」 30～34ページ	今後の大学改革に資することを目的として企画された「大学の新しい管理運営ならびに事務組織に関する現状調査」の調査研究成果として、一元的な学生支援体制に関して英国レスター大学の試みと特徴を紹介した。
27	求人への仕組みからみる人材の確保とスタッフ開発-レスター大学の事例-	共著	2006.3	香川大学大学教育開発センター『香川大学教育研究』第3号「特集：大学の将来-50年後を目指して-」 42～48ページ	「大学の新しい管理運営ならびに事務組織に関する現状調査」の調査研究では、厳しい財政状況において、今後の大学改革において、特に人事面で最大限各人の能力を引き出す必要がある。この調査研究成果の一つとして、英国レスター大学の求人方法ならびにスタッフ開発のあり方についての調査報告を行った。
28	大学教育における専攻重視のあり方-英米大学比較-	単著	2006.3	香川大学大学教育開発センター『香川大学教育研究』第3号「特集：大学の将来-50年後を目指して-」 68～76ページ	日本の大学の学部制と異なり、英米の大学の専攻分野のあり方は実に多様である。さらに専攻分野の統廃合も学問のあり方に柔軟に対応しており、専攻分野の取得のための学習期間なども専門分野において異なる。専攻重視の修学体系が学問のあり方に連動していることを明らかにした。
29	近代移行期における財産と所有の比較経済史研究	単著	2007.5	平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書（課題番号16402018） 研究代表者、単著 (全156ページ)	全部で10本の論文からなる海外学術調査に関する報告書である。平成16年度から18年度にかけて、西独ゲッティンゲンにあるマックス・プランク歴史学研究所を拠点に行った財産と所有に関する比較史的科学研究の成果である。6本の英文と4本の英文論文から構成されており、財産把握関連資料の地域性を明らかにし、後の科研基盤研究(A)の足がかりとなったものである。
30	Determinants of Inheritance Patterns in an Early Modern Japanese Village, Yukinobu. (査読付)	単著	2007.11	Historicka demografie 31/2007. Pp. 91-116.	チェコの著名な学術雑誌である歴史人口学において刊行された論文である。近世行信村の相続パターンに関する研究であるが、科研の海外学術調査の成果を受けて、相続パターンの地域性と家族構成のあり方に関して、行信村の58人の女性のライフコースを追うというマイクロ研究から地域の相続パターンを明らかにした。

31 近代移行期に関するローカル ヒストリー・アプローチ—マックス・ブランク 歴史研究所 (1957-2007年) の問題提起—	単著	2007.12	Physical History Research Project Working Paper No.1.全18頁	マックス・ブランク 歴史学研究所が2007年に閉鎖されることが確定したことを契機に、この研究所の半世紀の歩みを追った。研究所の最後の段階で、シュルムボーム、メディック、クリーテラによって、世界レベルでの比較が可能な歴史人口学的手法を取り入れた独自の新たなローカルヒストリーアプローチの成果が登場して来た背景を明らかにした。
32 Smallpox Quarantine Huts in 18th and 19th Century Amakusa Islands, Kyushu, Japan.	単著	2008.1	Physical History Research Project Working Paper No.2. 11 pages.	18世紀から19世紀にかけて、天草島では、他の近世日本の各地域と同様に、痘瘡が重要な死亡要因となっていた。ただ、天草の場合に特徴的なのは、痘瘡を忌避する習慣が非常に強く、また、島嶼地域であるだけに、痘瘡患者の隔離が実行されていた。ただ、その隔離によって、痘瘡の被害を少なくすることが出来た地域とそうではなく痘瘡流行により壊滅的な人口減少を記録した地域のあることを明らかにした。
33 A Polluted Island in the Inland Sea of Japan	単著	2008.3	Tsunetoshi Mizoguchi (ed.), <i>The Environment Histories of Europe and Japan. Initiative for Attractive Education of Graduate School (Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University)</i> Pp.109-116	環境史研究が視野に入った最初の論考である。オックスフォード大学の神戸インスティテュートで開催されたヨーロッパと日本の環境史に関する比較研究のための国際研究集会で発表した内容のプロシーディングスに掲載された論文である。香川県豊島の産業廃棄物問題と人口変化として日本の経済発展の過程との関連を明らかにした。
34 ヨーロッパにおける主従関係 と住民把握の論理	単著	2008.3	笠谷和比古編『公家と武家 IV 官僚制と封建制の比較 文明的考察』 思文閣出版 466～488ページ	博士論文以来の研究対象地域であるヴッパータールのバルメンに関する1698年の住民台帳に関する比較制度的分析的な論考である。住民台帳が登場する背景を明確にしているのが、その住民台帳に記されている前文であり、当時の社会経済的背景やその住民台帳を作成する意図などが明確にされている。従来、住民総数を数えるために利用されていた資料であるが、その比較史的科学的意義を明らかにした。
35 ドイツの大学史と大学文書館	単著	2008.11	慶應義塾『三田評論』 No.1117 所収 29～33ページ	ドイツでは大学文書館が整いつつある。中世以来の大学、信条化の時代に転換した大学、啓蒙の時代の大学そして、工科系大学の登場など、大学史の概要を踏まえつつ、知の世界の歴史の変遷を明らかにした。
36 高齢社会における世帯の地域 性と高齢者扶養	共著	2008.12	香川大学教育開発センター 『高齢化社会へのア プローチ』美巧社 99～112ページ	少子高齢社会そして人口減少社会となった日本であるが、少子社会、高齢社会、人口減少社会が与えるインパクトは各地域で異なる。この三者による変化は比較的強度な地域的な家族類型を大きく変容させる可能性のあるもの、三世同居が息づいている社会と単身者世帯あるいは単婚小家族世帯が中心となっている地域は三者のインパクトが異なる故に、個別の地域対応が高齢者福祉において重要であることを明らかにした。
37 近世村落史料の体系性と比較 分析の可能性	単著	2009.1	日本村落研究会編『近世 村落社会の共同性を再考す —日本・西欧・アジア における村落社会の源を求め て』 農山漁村文化協会 73～111ページ	科研の基盤研究(A)で行って来た研究成果の一部を公開した。近世村落史料には一定の体系性があり、近世社会を明らかにするためには、単純に文書を解読し、その書かれた内容を分析するだけではなく、その文書の存在自体を分析する必要があることを明らかにした。また、そのような比較史的科学的な方法により、旧来の社会比較とは異なる論点を見いだすことができることも明らかにした。
38 中近世ドイツ地方史からみた 相続慣習	単著	2009.10	國方敬司・永野由起子・長 谷部弘編著『家の存続戦略 と婚姻—日本・アジア・ ヨーロッパ』 刀水書房 161～178ページ	旧来主張されていた様々なドイツの家族制度は、歴史研究が進めば進むほど、単一のシステムではなかったことが明らかになっている。近世社会は、特に家族や世帯のあり方については、多様性の社会であり、相続慣習のあり方においてもその点は顕著である。また、単にある地域的な慣習ということではなく、歴史資料の生成過程を踏まえて考察において、その地域性が生み出されるメカニズムを明らかにした。
39 Smallpox and Population Change in 18th and 19th Century Amakusa Islands, Kyushu, Japan	共著 (第1 執筆)	2010.3	Satomi Kurosu, Tommy Bengtsson and Cameron Campbell (ed.), <i>Demographic Responses to Economic and Environmental Crises.</i> Pp.239-251	18世紀から19世紀にかけての天草島での痘瘡に起因する死亡率の変化を明らかにした。天草では、痘瘡を忌避する習慣が非常に強く、また、島嶼地域であるだけに、痘瘡患者の隔離が実行されていたことが、年齢別死亡率の特徴に反映されていることを明らかにし、また、隔離によって、痘瘡の被害を少なくすることが出来た地域と壊滅的な人口減少のあった地域の人口学的特徴についても明らかにした。
40 Water Culture in Japan and Germany	単著	2010.4	<i>Water Resources and Disaster Management at Macro and Micro Levels</i> Postgraduate Programs in Disaster Management (PPDM), BRAC University. Proceeding of International Seminar (12th September, 2009, BRAC Centre INN Auditorium, 75 Mohakhali, Dhaka 1212) Pp.59-73	EU統合後のヨーロッパでは水資源問題は、国境を越えた共同歩調が取られるようになっている。河川改修などにおいても、地域住民の参加による計画案の策定が必要であるという指針が示されると、各国でそれぞれの法制化のプロセスが観察される。アジアにおいては、そのような共同歩調は見られず災害に常に悩まされる日本においては、一貫して災害対策に重点化された法制化のプロセスが観察されることを明らかにした。

41 比較史料学で読む「河川の歴史」ー過去への新たなまなざしー	単著	2011. 3	Environmental History Research Project Working Paper. No. 5. 全14頁	河川を総体として対象とする文献が多数登場して来ている。歴史学研究において、社会史研究が登場してきた時代と同様に新たな環境史研究の潮流を見いだすことができる。ただ、経済史、文化史、社会史などと同様に新たな分野として加わるのか、それとも全く新たな社会問題への回答を与える分野として加わるのか、まずは、新たな歴史研究の息吹を支える史料とは何かを明らかにした。
42 Water Management and the Renaturalization of Rivers: A Local History Approach to International Comparison between Germany and Japan.	単著	2011. 3	The Oxford-Nagoya Environment Seminar. The Environmental Histories of Europe and Japan. Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University. Pp.43-53	オックスフォード主催の環境史研究会の第二弾として、名古屋大学環境学研究所との合同で開催された国際シンポジウムのプロシーディングスに収められた論文である。河川改修時に再自然化、近自然化の河川改修が日本でもドイツでも見られる。その特徴と両国での違いを明らかにした。
43 Seashore Villages in Amakusa: Takahama and Sakitsu. A Comparative Study of Population Registers and Disaster Management in the 19th Century, Kyushu, Japan. (査読付)	共著 (第1執筆)	2011	Popolazione e Storia (Forthcoming)	イタリアの著名な人口学関係の雑誌に掲載される論文である。日本では、ヨーロッパのように風土病になっていた地域もあるが、天草のようにあくまでも瘡癩を忌避する習慣が強い地域に二分されていた。天草での隔離政策は一定の効果があったことが確認されると同時に、瘡癩の隔離だけでなく経済的にも隔離され、壊滅的な村の衰退を招いた地域もあったことが証明された。
(その他)				
1 全国学会発表：ドイツにおける信系の時代と改革派教会の自律性	単著	1994. 5	日本西洋史学会第44回全国大会	カルヴァン派である改革派教会は独自の史料群である教会会議の議事録を有している。この議事録から改革派教会の自律性に関する検討を行った結果について、日本西洋史学会で報告した。
2 全国学会発表：衰退する都市と発展する都市ー近世ドイツ・ベルク公爵領の場合ー	単著	1994. 5	1994年度歴史学研究会大会	近世ドイツのライン下流に位置するベルク地方における都市の衰退と発展の特徴を明らかにした。特に、中世から近世にかけての決定的な変化である教会の自律化そして農村工業の勃興などとの地域的連関について、歴史学研究会大会で報告した。
3 全国学会発表：初期近世のドイツは多元的分立社会か？ー改革派の産業都市エルバーフェルトからの観察ー	単著	1996. 5	社会経済史学会第65回全国大会	改革派の産業都市エルバーフェルトは宗教上の自律的な共同体であると同時に、燃糸漂白業に基づく繊維産業を中心に独自の経済的な自律性も兼ね備えていた。地域社会が多様な役割と機能において、自律性を備えていた要因として、近世独自の国家体制が存在したことを明らかにした。
4 国際研究会発表：Regional customs in Japan and regional identity in Germany: From the dual structure model to comparative socio-economic history.	単著	1996. 12	国際日本文化研究センター第11回国際研究会	婚姻年齢の分布とその分布形態の経年的な変化について、近世ドイツと日本の比較分析の結果を受けて、その原因を探る論考を発表した。特に分布のあり方の歴史的变化その地域の地域特性を明確に示しているという点について、地域経済や生活形態を決定づけている地方の慣習がより大きな影響を与えている社会と、宗教的価値などの自覚に基づく人間行動が一定の地域性を示す社会の違いを明確にした。
5 国際学会発表：Regional differences in the age at marriage: A comparative analysis of early modern Germany and Japan.	単著	1998. 3	The Second European Social Science History Conference. Amsterdam, The Netherlands	ドイツ語圏と日本の近代移行期について、婚姻年齢の平均値ならびに分布の歴史的变化に関する比較研究を行った。特に歴史的变化として観察される標準化は、時代と場所によって相違が見られるものであり、家族の地域性を議論する差異に関してその歴史的变化に注目する必要があることを第2回ヨーロッパ社会科学歴史学会で報告した。
6 海外講演：Schwierigkeiten zu heiraten, oder freiwillig alleinstehend? Das Unverheiratetsein als ein Lebensstil im Deutschland der Frühneuzeit.	単著	1998. 5	Humboldt Universität Berlin. Historisches Institut. BRD	ドイツ語での講演であり、特に近世ドイツあるいはヨーロッパの特徴として、未婚比率が高い原因について、婚姻をしないということが、当時の生活スタイルとして定着していたのか、それとも婚姻ができる経済的条件などが整わないために結婚しなかったという点について議論し、今後の研究可能性を明らかにした。
7 海外講演：Japan Ost und Japan West. Geschichte eines regionalen Konfliktes.	単著	1998. 5. 25	Universität Leipzig. Ostasiatisches Institut. BRD	日本の地域性特に人口学的な地域性はいかに観察されるのか。また、文化的にも様々な地域性が観察できるが、それらには何らかの対立構図というものがあるかどうかについて、歴史人口ならびに家族史研究の成果から、今後の比較研究の可能性に関する意義を明らかにした。ドイツ語による講演である。
8 海外講演：Japan Ost und Japan West. Geschichte eines regionalen Konfliktes.	単著	1998. 5. 27	Universität Japanologie. BRD Halle.	日本の地域性特に人口学的な地域性はいかに観察されるのか。また、文化的にも様々な地域性が観察できるが、それらには何らかの対立構図というものがあるかどうかについて、歴史人口ならびに家族史研究の成果から、今後の比較研究の可能性に関する意義を明らかにした。ドイツ語による講演である。

9 国際研究会発表：Arbeitsgemeinschaften „Geschichte“	単著	1999. 6. 1	Alumni-Seminar der ehemaligen Stipendiaten in Japan: Deutsch-japanischer Akademischer Austausch: eine kritische Bestandsaufnahme. Berichte aus den Arbeitsgemeinschaften im Plenum: Abschluß diskussion.	ドイツ学術交流会主催のシンポジウムにおいて、歴史学研究における日独交流のあり方に関する座長を務め、討議の結果をシンポジウムで報告した。
10 国際学会発表：Transnational networks of Calvinism in early modern Europe. A German reformed church in Elberfeld in and after the period of 'Confessionalization'.	単著	2000. 4. 1	The Third European Social Science History Conference. Amsterdam, the Netherlands.	第3回ヨーロッパ社会科学歴史学会において、初期近世ヨーロッパにおけるカルヴィニズムの有する国境や国民性を越えたネットワークについて、詳細な教区簿札の分析から報告した。
10 国際学会発表：The History of the Family in Japanese Journals	単著	2000. 10	The 25th Anniversary Meeting of the Social Science History Association, Pittsburgh, USA	日本の家族史研究の研究動向に関して、日本の学術雑誌に登場する論文のタイトルと概要の分析結果を、他の国々における家族史研究の動向との比較の観点において、第25回社会科学歴史学会で報告した。
11 国際学会発表：Transformation of the family in pre-industrial Germany: Family property and communal wealth in the Wupper Valley	単著	2002. 2	The Fourth European Social Science History Conference. The Hague, the Netherlands.	家族の財産がいかんにかに継承されるのか、また、家族の財産の背景である地域の富の形成と階層分化とはどのような関係にあるのか、ライン下流地方のブッパータールに関する一次史料に基づく分析結果を第4回社会科学歴史学会で報告した。
12 国際学会発表：Life course and household of hidden Christians in Amakusa Islands	単著	2002. 10	The 27th Annual Meeting of the Social Science History Association, St. Louis, USA.	近世天草における隠れキリシタンの家族のあり方に関して、ライフコース分析に基づき明らかにした信仰の伝播と家族構成との関係について、第27回社会科学歴史学会で報告した。
13 国際学会発表：Family property in a German pre-industrial community. An economic transition.	単著	2003. 11	The 28th Annual Meeting of the Social Science History Association, Baltimore, USA.	ライン下流地方ブッパータール地方の租税台帳の分析を通して、家族の財産がどのように変化してかについて、特に繊維産業の勃興と商業化との関連について得られた知見を、第28回社会科学歴史学会で報告した。
14 国際学会発表：Inhabitants in comparative perspective. Religious registration and population register.	単著	2004. 3	The Fifth European Social Science History Conference, Berlin, Germany.	ある一定の地域に居住しているということは何を意味するのか、特に、信仰調査と住民登録簿が成立する背景と相互関係はどのように理解できるかという点に関して得られた分析結果を、第5回ヨーロッパ社会科学歴史学会で報告した。
15 全国学会発表：マイクロスタディはドイツ研究になにをもたらすか？	単著	2004. 6	日本ドイツ学会シンポジウム 慶應義塾大学	ドイツという総体を一つの特徴として議論することができるのは、ドイツと比較できる地域総体、つまり、フランスやイギリスなどが存在するからである。中長期的な歴史資料を観察すれば明らかなのは、自明の前提としている「ドイツ」そのものを問題にする必要があるということであり、さらに、より詳細なマイクロレベルでの観察は捨象されていた地域の要素を発見することができることを報告した。
16 国際学会発表：The Thirty Years War and a change of marriage pattern in a reformed church in Germany.	単著	2004. 11	The 29th Annual Meeting of the Social Science History Association, Chicago, USA.	30年戦争が与えた影響に関して、特に婚姻パターンにどのような変化が見られたかという点について、ライン下流地方エルバーフェルトの改革派教会が保有している一次史料に基づき、親類縁者のネットワーク変化や婚姻年齢の変化などの詳細を第29回社会科学歴史学会で報告した。
17 全国学会発表：西洋経済史の視点から	単著	2005. 5. 2	社会経済史学会第74回全国大会パネル・ディスカッション3「近世日本の村落社会における市場経済化と共同性の構造」コメント（一橋大学）	ドイツ語圏では長く中世から近世への以降に関して、共同体主義がどのような影響を与えて来たのかを論じて来た。このような近世ヨーロッパの中のドイツという視点から、近世日本の村落社会に関するコメントを行った。
18 全国学会発表：中近世ドイツにおける相続パターン決定要因	単著	2005. 5. 29	比較家族史学会第47回研究大会テーマ報告（「家の存続戦略と婚姻」）（山形大学）	旧来主張されていた様々なドイツの家族制度は、歴史研究が進めば進むほど、単一のシステムではなかったことが明らかになっている。近世社会は、特に家族や世帯のあり方については、多様性の社会であり、相続慣習のあり方においてもその点は顕著である。また、単にある地域的な相続慣習ということではなく、歴史資料の生成過程を踏まえて考察において、その地域性が生み出されることを比較家族史学会大会で報告した。
19 国際学会発表：Determinants of inheritance patterns in Japanese preindustrial societies.	単著	2005. 7	The 20th International Congress of Historical Sciences (CISH), Sydney, Australia.	近世行信村の相続パターンに関する研究であるが、科研の海外学術調査の成果を受けて、相続パターンの地域性と家族構成のあり方に関して、行信村の58人の女性のライフコースを追うというマイクロ研究から地域の相続パターンを明らかにした。この点について、第20回世界歴史学大会で報告した。

20 国際研究会発表：Zwischen dem neuen Steuerstaat und der mittelalterlichen Tradition: Der Beitrag einer bürgerlichen Advokatenfamilie zur Gründung des Stadtgerichtes in Elberfeld von 1708.	単著	2005. 9	Staatsbildung von unten: Europa 1300-1900. Konferenz an dem Monte Verità, Ascona Schweiz	スイスで開催された「下からの国家形成」に関する国際シンポジウムにおいて、中世的な領域国家と近世租税国家の違いについて、ライン下流地方エールバーフェルトに1708年に都市裁判所が設置されることに注目して、その際、特に法学的な専門家が登壇して行く社会制度的背景を分析した結果を報告した。
21 国際学会発表：Marriage market in a comparative perspective.	単著	2005. 11	The 30th Annual Meeting of the Social Science History Association, Portland, USA.	そもそも婚姻市場とは何か、近世社会において婚姻市場は存在すると考えてよいのかどうか。人口学的には男女比率や婚姻圏などにおいて、疑似「市場」的な議論ができるが、国際的な地域比較によって明らかにできることは何かという点について、第30回社会科学歴史学会で報告した。
22 国際学会発表：Smallpox quarantine houses in 18th and 19th century Amakusa Islands, Kyushu, Japan.	単著	2006. 3	The Sixth European Social Science History Conference, Amsterdam, the Netherlands.	18世紀から19世紀にかけて天草高浜で存在した痘瘡患者を隔離するための除き小屋ならびに山小屋が、痘瘡による死亡率にどのような効果があったかを検証した結果を第6回社会科学歴史学会で報告した。
23 公開ワークショップ発表：産業廃棄物と備瀬瀬戸の豊かな島—豊島の高度経済成長時代—	単著	2006. 12	「日本の環境史をめぐる諸問題」名古屋大学環境学研究所社会環境学専攻人間・社会環境学構築ワークショップ/魅力ある大学院教育イニシアティブ関連事業、名古屋大学環境総合館3階 講義室3	オックスフォード大学の神戸インスティテュートで開催されたヨーロッパと日本の環境史に関する比較研究のための国際研究会で発表する予定の内容を公開シンポジウムで報告した。香川県豊島の産業廃棄物問題と人口変化そして日本の経済発展の過程との関連を明らかにした。
24 海外講演：Japonská žena v období raného novověku (= Lebensläufe der japanischen Frauen in der Frühen Neuzeit).	単著	2007. 1	Historický ústav Filozofické fakulty. Jihočeské univerzity v Českých Budějovicích. (University of South Bohemia)	近世日本の女性史研究特に歴史人口学的な史料分析から行える研究はどのような方向性を有しているのか。また、それが、チェコやヨーロッパの歴史人口学的研究とどのような関連があるのかについて、ドイツ語で講演した。
25 国際研究会コメント：Two Analytical Aspects of Historical Sources	単著	2007. 8	Historical Maps and Gis. Initiative for Attractive Education of Graduate School, Graduate School of Environmental Studies, Nogoya University, Japan.	歴史地理情報に関する国際研究会において、歴史資料の分析における二面性を明らかにし、歴史学研究における比較史料学的方法の有効性を国際研究会の方向に絡めてコメントした。
26 国際研究会発表：A Polluted Island in the Inland Sea of Japan.	単著	2007. 9	The 1st Oxford-Kobe Seminar of "Environmental History of Japan and Europe, St Catherine's College (Oxford) Kobe Institute, Kobe, Japan.	香川県豊島の産業廃棄物問題と人口変化そして日本の経済発展の過程との関連について、日本で最初の環境研究の国際研究会で報告した。このシンポジウムはオックスフォード大学の主催で行われ、ヨーロッパから多くの研究者が招待された。この研究会を契機に新たな研究プロジェクトが開始された。
27 国際研究会発表：Erbschaft und Familie in einem Dorf des frühneuzeitlichen Japans	単著	2007. 11	Charles University, Prague, Czech Republic.	近世日本の農村における相続慣習と家族のあり方とがどのような関係にあるのか、プラハ大学で行われた国際研究会において、ドイツ語で報告した。ドイツ、チェコに関する歴史人口関係の報告も行われ、科研での研究成果について公表する機会となった。
28 全国学会発表：近世村落史料の体系性と比較分析の可能性	単著	2007. 12	日本村落研究会2007年度第55回大会テーマ報告、鹿児島県大隅半島根占	近世村落史料には一定の体系性があり、近世社会を明らかにするためには、単純に文書を解読し、その書かれた内容を分析するだけではなく、その文書の存在自体を分析する必要があることを明らかにした。また、そのような比較史料学的方法により、旧来の社会比較とは異なる論点を見いだすことができることに關して報告した。
29 国際学会発表：Poor Households in the Wupper Valley, a Proto-Industrial Region in Germany, 1663-1673.	単著	2008. 2	The Seventh European Social Science History Conference, Lisbon, Portugal.	1663年と1673年という10年間の間隔において作成されたライン下流地方ヴッパータールの租税台帳に関する詳細な比較分析の結果を第7回ヨーロッパ社会科学歴史学会で報告した。10年という短い期間ではあるが、想像以上に家族編成の変化が大きく、30年戦後の急激な経済発展のあり方が観察された。
30 国際研究会企画発表：An Intellectual History of Water Culture: Environment and Development.	単著	2008. 11	The First International Workshop on Water Culture and Distance Learning: Europe, South-Asia, and Japan, Takamatsu, Japan, November 5th, 2008.	香川大学において、ドイツ、チェコ、バングラデシュ、インドから研究者を招待して、水文化研究とその成果を市民や大学生に還元する遠隔教育にどのように活かすかという点に関するシンポジウムを企画し、自ら冒頭の基調講演を行った。
31 国際研究会企画発表：Reservoirs and Ponds in Sanuki, Kagawa, Japan.	単著	2008. 11	The First International Workshop on Water Culture and Distance Learning: Europe, South-Asia, and Japan, Takamatsu, Japan, November 5th, 2008.	上記のシンポジウムにおいて、香川県のため池に関して、歴史資料における干魃、洪水の記録と讃岐におけるため池築造の歴史との関係を明らかにした。水文化研究は、日常生活の変化と密接に関係する分野であり、地域社会において常に情報が広く共有される必要がある点について報告した。

32 国際学会発表: Smallpox and Population Change in 18th and 19th Century Amakusa Islands, Kyushu, Japan.	単著	2009. 5	IUSSP Seminar. Demographic Responses to Sudden Economic and Environmental Change, May 21-23, 2009. Reitaku University, Kashiwa, Chiba, Japan.	麗澤大学で開催された世界人口学会主催のシンポジウムにおいて、天草高浜と崎津の人口データに基づく痘瘡の人口学的影響に関する報告を行った。特に、天草では、痘瘡を忌避する習慣が非常に強く、また、島嶼地域であるだけに、痘瘡患者の隔離が実行されていたことが、年齢別死亡率の特徴に反映されていることを明らかにした。
33 国際学会発表: A Transnational Intellectual History of Water Culture in Japan: Meiji Restoration, Hounenmultiple-arch dam and Typhoon Isewan (Vera).	単著	2009. 8. 4-8	The First World Congress of Environmental History. August 4-8, 2009. Denmark-Sweden.	第1回世界環境史学会がデンマーク・コペンハーゲンとしてスウェーデンのマルモの二都市を拠点に開催された。明治以降に構築された種々の港湾施設、河川改修、あるいは豊稔ダムのような石工と近代技術との接合、伊勢湾台風の影響による日本の災害対策のための防潮堤建設など、水文化の形成には科学技術に関する国を越えた知的ネットワークが重要な役割があることを示した。
34 国際学会発表: Smallpox and Quarantine Policy in 18th and 19th Century Amakusa Islands, Kyushu, Japan.	単著	2009. 8. 23-27	The 14th International Conference of Historical Geographers. 23-27 August 2009. Kyoto, Japan.	天草諸島の痘瘡の流行、地理的な伝播のあり方に関して、種々の人口データならびに一資料を駆使して、村々へ疫病がどのような広がっていくかと地理的に明らかにした。第14回国際歴史地理学会で報告した。
35 全国学会発表: 近世文書の体系性と近代へと進む地域情報の蓄積	単著	2009. 9	社会経済史学会第78回全国大会、パネルセッション: 「プロト近代行政」における領民把握—近世的「発展」に関する比較史的アプローチ—、東洋大学	科研の基盤研究(A)の研究成果として、社会経済史学会の全国大会においてパネルセッションを組織し、近世文書の体系性と其の体系性が地域情報の蓄積過程とどのような関連性があるかについて報告した。
36 国際研究会企画発表: Seeking a Community-based Environmental Education Module: Water Culture in Japan and Germany in Comparison.	単著	2009. 12	The Second International Workshop on Water Culture. Ceske Budejovice, Czech Republic, December 2, 2009.	チェコの南ボヘミア大学において、水文化に関する国際研究会を企画し、日本とドイツの近年の水環境への取り組みの特徴について、特に、コミュニティによる地域開発の取り組みに関する報告を行った。この企画は、挑戦的萌芽研究の一環で行った。
37 国際学会発表: A Seashore Village, Sakitsu. A Comparative Study of Population Register and Disaster Management in the 19th Century, Kyushu, Japan.	共著	2010. 4	The 8th European Social Science History Conference, in Ghent, Belgium.	近世社会においても当然種々の災害対策が行われている。18世紀から19世紀にかけての天草諸島における疫病対策のあり方、そして、基本的にキリシタン禁制のために作成されていた住民台帳が、疫病の蔓延を防ぐために有効に活用されていたことを、第8回社会科学歴史学会で報告した。
38 全国学会発表:	単著	2010. 6	日本人口学会第62回全国大会、テーマセッション: 歴史的視点から見た人口統計と人口政策、お茶の水女子大学	近世南ボヘミアには膨大な独自の資料群が残されている。「孤児記録簿」と称するものであるが、実質的な住民台帳であり、毎年作成されていたため一種のセンサス的な資料でもあった。この発見に基づき、日本人口学会における歴史人口学会のテーマセッションで報告をした。
39 国際研究会企画発表: Water Management and the Renaturalization of Rivers: A Local History Approach to International Comparison between Germany and Japan.	単著	2010. 9	The Environmental Histories of Europe and Japan (The Oxford-Nagoya Environment Seminar). Nagoya University, Nagoya, Japan.	オックスフォード大学主催の環境史に関する国際研究会が名古屋大学で開催され、河川の再自然化の動きに関する日独比較について報告した。特に、ヨーロッパの統合後、水環境に関しては特に国境を越えた取り組みが各国あるいはドイツの場合では各州の法制化のプロセスに決定的な影響を及ぼしていることを明らかにした。
40 国際研究会企画発表: Rivers in History. New Perspectives on the Past.	単著	2011. 3	The First Workshop on Environmental History. International Consortium for Earth and Development Sciences of Kagawa University, Japan.	香川大学で組織している地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム主催による環境史に関する国際研究会を企画し、バン格拉デシュならびにタイより研究者を招待した。ここでは基調講演として、河川の歴史研究の歴史的インパクトについて報告した。

(注)

- この書類は、学長（高等専門学校にあっては校長）及び専任教員について作成すること。
- 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。
- 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
- 「氏名」は、本人が自署すること。
- 印影は、印鑑登録をしている印章により押印すること。ただし、やむを得ない事由があるときは、省略することができる。この場合において、「氏名」は、旅券にした署名と同じ文字及び書体で自署すること。